小不平なる故將軍家をも侮じまいらせ失禮の事少からざれバ。義輝公今ハ堪へ松永が擧止を怒らせ給ひ罪を責べくおぼさるゝまでに。その御威勢ましまさねバ御眉を顰め給ふこと甚しくあらせらるゝのみ。松永と御心あはせし三人衆和らげ玉ハで御念の志ふて過させ給ふ。茲に阿波の御所義榮公（足利義澄公の御子義晴公の御弟なり）と稟せしハ阿州に久しく在せしが。當國の三好の親族多きをもつて義榮三好を恃ミ給ひ上洛の事を企らる。松永これを幸とし三人衆と謀りけらく。「近頃將軍某を憎ませ玉ふこと大方ならず。我のミならず足下達とも疎々しくおぼしめされ。禄を従てハ如何程忠節なるとも却て面々の仇となるべし。速に阿波の御所を守立當家の宗を計るべし」と勧めに三人同心しける所。阿州へ使者を遣上洛の事を告まゐらせ。即時に合戰の準備しけるが。將軍家にも聞しめされ密に三好松永等を追伐あるべき趣ありて。内々の人々に命ぜさる。其と聞より三好黨逆

○江陽館日紀をひらくに義輝公辞世の御詠に五月しさまのりはかりぞあの名やとどり得てぞ鳴る元の夜家でとありこれぞよしとせんといへども五月雨の一首ハ世人のよく知る所なるをもつて爰に挙く

推せんと永禄八年五月十九日の子の刻ばかりに松永久秀の指揮として三好日向守。松永主水助七百余騎にて御所に推寄。四方より推捕圍一重に圍む。其余隊伍東の方ハ三好義継四百五十騎を牽從へ加茂を渉りて荒神口より寄丸に幸弾正忠南の方ハ松永弾正一千余騎を隊列して壬生大宮に寄て且室町の西門口に十河一存五百余騎。西大路にハ三好笑岩二百余騎。北にハ岩成主税助六百余騎にて牽從ひ紙屋川より推進る。その威を現せとのゝしり四方の軍勢ハ二千六百有余人一時に鯨波を噇と揚。波濤の傍く小乱投出駒將軍御心地よく餠を啜りおはせしが。物と聞しめさるより事顕しとおぼしめされ騒がせ給ふ御氣色もなく

五月雨ハ露か涙か郭公我が名をあげよ雲の上まで

と詠じ給ひ。御打物を把せられ。斬出させ給へバ後れじと一色淡路守同又三郎